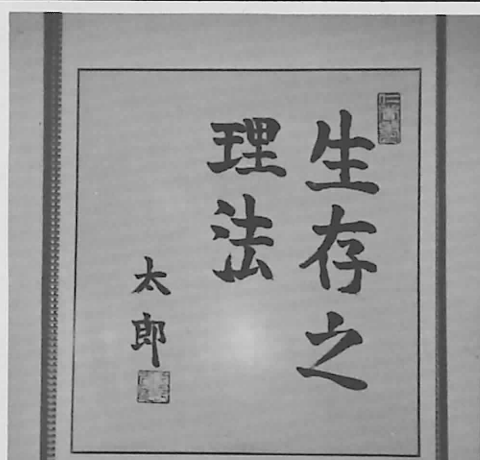


生存科学研究所

ニュース

Vol.3 No.1.

1988.1.10発行



目次

- | | |
|------------------------------|-----------------------------------|
| ●レオンチェフ教授と武見博士 筑井甚吉 …………… 1 | ●国際的視野での保健医療のために/武見プログラムでの一年 …… 5 |
| ●バイオエレクトロニクスへの挑戦 …………… 1 | —第3回武見フェロー報告 |
| —第36回生存科学研究会 | ●生存科学ビュー・ポイント「健康福祉」 …………… 7 |
| ●インターナショナル・ヘルスと日本の協力 …………… 3 | ●エッセイズ・キュート「Be patientの英語教育」 …… 7 |
| —第8回メティコ・エコノミックス研究委員会 | ●維持会員だより …………… 8 |
| ●アクティブ80ヘルスプラン …………… 4 | ●ニュース・オブ・ニュース …………… 10 |
| —第16、17回地域医療のあり方研究分科会 | ●ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告 11 |
| ●東洋医学からホリスティック・ヘルスへ …………… 5 | ●公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース …… 12 |
| —第7回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会 | ●編集後記 …………… 13 |

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

●巻頭言

レオンチェフ教授と武見博士

大阪大学社会経済研究所教授・生存科学研究所理事 筑井甚吉

武見先生は、レオンチェフ教授の環境問題や産業連関の世界モデルによる途上国援助問題へのアプローチを高く評価されておりましたが、他方レオンチェフ教授も、地球的視野に立った生態系の持続と人類生存のあり方を問う武見先生の問題意識に、完全な共感を示されました。このことは、レオンチェフ教授が参加された世界医師会の「医療資源の開発と配分」に関するフォローアップ委員会に関係した多くの人が、よく知るところです。

しかしながら、両先生の相互理解の根拠はこれに留まるものではないので、私の知るところを以下に記してみたいと思います。

御承知の方も多いと思われませんが、武見先生は経済表で有名な18世紀フランスの医師であり経済学者であつたケネーについて、深く研究されておりました。レオンチェフ教授が創始しノーベル賞受賞の基礎となつた投入産出分析の手法を、理論経済学者はワルラスの一般均衡理論の単純化による実証分析への適用であるとするのが通説ですが、武見先生はこれに反対されて、レオンチェフ教授の仕事はケネーの一般化であつて、ワルラスの単

純化ではない、と考へておられました。その根本的な理由は、レオンチェフがケネーと同様に常に理論の「実証」という考へを貫かれているのに対し、ワルラスには実証への指向が欠けている、という点にありました。真に偶然ですが、私も昔、武見先生とは独立に同様な考へを懐き、ある研究会でそれを指摘したことがありましたが、指導教官の山田雄三先生のコメントは、レオンチェフ教授御本人に確かめるのが一番良いというもので、いかにも実証経済学者の山田先生らしいものでした。それから2年足らずして、私はハーバード大学のレオンチェフ教授の研究所に研究員として赴任することになりましたが、夏休みが終つて教授が来所されるのを待ち兼ねたようにして、そのことを確かめました。教授は、「全くその通りである。ケネーの一般化というのが私の仕事に対する全く正しい理解である。」と答えられて、私に握手を求められました。このようなことから考へても、武見博士とレオンチェフ教授とが短い期間の間に深い相互理解に到達したのは、極く自然なことであつたと私は考へております。

●第36回生存科学研究会

バイオエレクトロニクスへの挑戦

11月21日(土)午後2時から、霞が関ビル東海大学校友会館において、第36回生存科学研究会が開催された。講師は日本電気株式会社副

社長の植之原道之氏で、氏は日本大学工学部、オハイオ州立大学大学院に学ばれ、日本電気株式会社の研究所所長も勤めておられた。

氏は、科学技術も生物と技術の境界、しいては人間と技術の境界から避けて通れない時代になったとし、日本電気の研究所でも、それに関連する基礎研究に着手していることを紹介され、以下のように講演された。

* * * *

コンピュータ等の先端技術を駆使してやっていく事業のなかで、使用する人と我々が提供する機械との間に大変大きな問題が出てきている。これからますます、マイクロエレクトロニクスや人工知能技術を駆使して高度な情報処理を、誰でも自由自在に使える状態にして行くには、人類が長い歴史のなかで身につけてきた自然な生活形態に合うような機械を開発していかなければ、なかなか受け入れられない。そうすると、地域文化と技術とが切っても切れない深い関になってくる。ヨーロッパの文化を背景にして芽ばえてきた技術だけに頼っていたのでは、日本はじめ東洋の諸国に本当に受け入れられる技術として製品を世の中に出していくことはむづかしい。そのような新しい環境の変化のなかで、東洋の歴史文化に根ざした新しい分野を開拓していかなければならない。これは困難な問題であるが、その困難に挑戦していくなかで次第に根付いてくると考えている。そういう意識のなかで、何を為すべきかを考え、バイオとエレクトロニクスの融合、それをバイオエレクトロニクスと名付けて、それに挑戦している。

人間が生きるための危機に際してブレイクスルーが起こるが、それは過去の経験、学習の蓄積がなければ出来ない。そこに教育の重要性があるが、科学的にそこにある相関関係を掴んでいきたい。例えば優れた中国の灸に関する技術を、医学的に明確にするためにも



もっと生体の相関関係を正確に知りたい。そういう技術が進歩すれば、もっと医学の進歩に貢献できるのではないか。その結果としてコンピュータもその基本概念を大きく変えて、人間に忠実な機械を作っていくことができるのではないか。今、コンピュータの使用による職業病が出ているが、未だ技術が未熟で人間に馴染まない部分があるからであり、人間が自然の行動様式で使えるものを経済的に提供できるようになる必要がある。こういう目的で自動通訳電話を研究したが、電話局という大きな規模なら出来るが、ポケットブルな機械は無理である。まだまだ技術の進歩が必要であるが、何万年も生き抜いてきた生物のなかに、何かその知識があるはずである。こういうことで取り組んでいるバイオセンサーの研究、線虫の情報系の研究、視覚情報処理系のスーパー・コンピュータを使ったシミュレーション研究等について紹介する。

コンピュータのパターン認識技術に関しては、日本が圧倒的に先を走っている。それは日本が漢字文化圏にあるからであり、その技術によりマン・マシン・インターフェイスの効率を非常に上げることができる。それには認識技術と半導体技術が進歩しなければならなかったからである。

現在、日本もこれだけ経済力がついてきており、日本のためにだけでなく、国際社会にも貢献できるという立場で科学技術を進歩させていかなければならない。必要に迫られ、叱られて初めて技術の進歩は得られる。歴史的にも、社会の変化に刺激されて科学技術の進歩が大きな周期をもったロジスチックカーブを描いて起こっており、それが経済の周期とも深い相関関係をもっている。科学技術の進歩がロジスチックカーブを描くということは、完全に学習による。結果として成果が出ているといえる。学習が如何に重要であるか。そしてその学習が環境に影響を受けているということは避けられない歴史的事実である。常に、平穩に生存したいという夢はあるが、果たしてそれで生存できるかという疑問が起

きる。常に社会というものには変動があつて、始めて我々人類は健全に種を維持していけるのではないかと考えている。

* * * *

以上の講演のあと活発な質疑・討議が行なわれた。

今回は、13名の方が生存科学研究会に入会を申し込まれ、当日出席された新会員の自己紹介が行なわれた。

生存科学研究会新会員 (順不同 敬称略)

松田英成	廣畑富雄	我妻 堯
原 次郎	時子山ひろみ	久保まち子
左奈田幸夫	有馬弘毅	梅田博道
高橋由美子	小玉香津子	柴田久雄
森重利直		

●第8回メディコ・エコノミックス研究委員会

インターナショナル・ヘルスと日本の協力

10月17日(土)午後3時から、研究所会議室において、第8回メディコ・エコノミックス研究委員会が開催された。今回の演者は国際協力事業団の北林春美女史で、演題は「インターナショナル・ヘルスと日本の協力」。北林女史は国際協力事業団から、最近までハーバード大学公衆衛生大学院へ留学、ヘルス・ポリシー・マネジメントを研究され、その間に開催された1986年の第2回武見国際シンポジウムへも出席されている。以上から、ハーバード大学公衆衛生大学院について、インターナショナル・ヘルスについて、及び日本の援助システムの現状について述べられた。その概要は以下のとおり。

* * * *

Harvard School of Public Healthには独立したInternational Healthという学科はなく、各学科の中に設けられている『インターナショナル』なテーマの科目に関心のある学生が選択する。

『International Health』という言葉は明確に定義されているわけではないが、学内では主として開発途上国の国民の健康にまつわる諸問題とそれらに対する取り組みとして理解されているようであった。

疫学や経済学など分析の手法は原則として他のテーマを扱う場合と異なるものではない。しかし途上国の健康問題を単に「先進国の〇〇年前と同じ」や「熱帯地方に特有の風土病」というだけでなく深く理解するために、講義

やケーススタディを用いた各科目が以下のような各点について実施されている。第一に、途上国の社会に共通している疾病や人口にかかわる解決が求められている問題は何かということ。次に保健・医療サービスに関する制度や組織は如何に在り、問題の解決のためにこの制度や組織の中であるいは制度や組織そのものに対して試みられている解決の方策にはどのようなものがあるかということ。第三に先進国の投資や企業・製品の進出、開発援助がもたらす途上国々民の健康への（マイナスの）効果と先進国は何をなすべきか（なさざるべきか）ということ。

保健医療分野の日本の政府開発援助は主として無償資金協力（施設建設・機器購入のための資金供与）と技術協力（研修員受入れ・専門家派遣・機材供与）の枠組の中で実施されている。日本の援助の特徴は、地域保健など「高度な技術」を必要としない、面的広がりをもつプロジェクトが少ないことである。これはひとつには日本の援助の仕組みがこの

ようなタイプの援助を困難にする性格を内包しているからであり、さらに日本の中に各国の保健に関する知識の蓄積とそれらを生かして活躍するInternational Healthのプロフェッショナルとしての人材の養成や確保が遅れているためではあるまいか。

* * * *

討議では、インターナショナル・ヘルスとは、先進国を含め、伝染病の国際的伝播への対応の問題等広い意味をもつこと。日本の援助の特長としてエバリュエーションが明確でないので、評価をしっかりとる必要があること。一般にオペレーションコストが不足であること（これは日本の行政全般の基本的問題）。海外へ派遣された人の帰国後の受け入れ体制が足りないこと。相手方の受け入れ方も影響するが、受け入れ国の自主的開発へのサポートが必要である、等のことが検討された。また我妻委員から、昨年国立医療センターに国際医療協力部が設置され、我妻氏を部長として活動を開始していることが紹介された。

●第16、17回地域医療のあり方研究分科会

アクティブ80ヘルスプラン

10月3日午後2時から第16回研究分科会が開催され、討議の結果、報告書のスケルトンに関して合意が得られた。

11月28日午後2時から第17回研究分科会が開催された。今回は前回に引き続き報告書のとりまとめに関する検討と、厚生省松田朗委員から「厚生省第2次国民健康づくり対策」について報告があった。

* * * *

第2次国民健康づくり対策は「アクティブ

80ヘルスプラン」という副題が付いているが、能動的に人生80年時代を生き抜くヘルスプランという意味である。このプランは、栄養・運動・休養の3つの基本要素から成り立っており、来年度からは特に「運動」を中心に施策を展開していく。

具体的には、健康運動指導員の養成、運動普及推進員（ボランティア）の育成、民間健康増進施設の組織化、適正施設の普及、民間健康増進施設に対する優遇措置、健康増進セ

ンター・保健所・市町村保健センターの整備
促進及び機能強化、全国健康福祉祭の開催、
運動プログラムの研究開発・提供が企画され、
その一部については既に具体化している。

厚生省ではこのヘルスプランを推進することにより、国民の生活スタイルの改善を図り、
心臓病・脳卒中・高血圧・寝たきりを半減し
たいと考えている。

●第7回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会

東洋医学からホーリスティック・ヘルスへ

10月24日行なわれた第7回医薬品産業の
長期展望に関する研究分科会の講師は、薬剤
師、哲学博士の高橋由美子女史で、女史は東
京理科大学薬学部薬学科を卒業、クレイトン
大学主任教授、日本ヘルス協会理事、日本ペ
ンクラブ会員、創美学研究所所長他いくつも
の肩書きを持たれて、ユニークな活躍をして
おられる。
ホーリスティック・ヘルス、ホーリスティッ

ク医学等に関する参考資料を提出され、御自
身の体験から出発し、東洋医学の種類、東洋
医学の病因論、長寿村の研究等について述べ、
ホーリスティック医学を、環境と身体、精神
と肉体について論じられた。

ホーリスティック・ヘルス(医学)は正に故
武見先生が主張されていた全人的医療の重要
性に通じるものがあるといわねばならない。

●武見フェロー報告

国際的視野での保健医療のためにー武見プログラムでの1年

東京大学医学部国際交流室講師・第3回武見フェロー 丸井 英二

1986年9月から1987年6月までの10か月
間、第三年度の武見フェローとして私は他の
4人と共に、ボストンのハーヴァード大学公
衆衛生学部の武見のプログラムで過ごす機会
を与えられました。私自身がその少し前に
新設されたばかりの東京大学医学部国際交流
室(Division of International
Health)に、疫学教室から移り、国際的な視
野で健康、医療、医学を捉えなおし、日常的
な活動をも進めていこうとう立場になってい
たので、このプログラムの名称がTakemi
Program in International Health
であることに大変興味をそそられていました。

そこで、一年間の個人的研究計画としては、
日本を中心とした国際的な方向を向いた研究
テーマで、しかも自分が以前から機会があれば
是非すすめてみたいと考えていた、「第2次
大戦後の占領期における日本の公衆衛生に及
ぼしたアメリカの影響」という内容を渡米前
に用意しました。

アメリカの公衆衛生学部はすべて大学院で
あり、その意味では大学院大学ということに
なります。ハーヴァードの場合、中心となる
カレッジがボストンからチャールズ川を隔て
たケンブリッジにあり、その周辺に有名なピ
ジネススクールを初めとした一連の大学院が

あります。公衆衛生学部は医学部、歯学部と共にボストン市街の南西に離れて位置し、ここに14階、5階、10階の三つのビルを持っており、わが国で考える公衆衛生の概念からは想像できないほど規模も大きく、広範囲の問題をカバーしています。がんの生物学を扱う部門から、熱帯公衆衛生、保健政策・マネージメントの部門まで幅広くスタッフも揃っています。この点では、他の著名な公衆衛生学部、例えばジョンズ・ホプキンス、ミシガン、ノースカロライナといった大学も程度の差こそあれ、同じような方向にあります。

そのような環境のなかに、国際保健を標榜する武見プログラムがあります。武見フェローとしてすべきことは、まず自分の研究テーマをアドバイザーと相談しつつ進め上げること、そして毎週の武見研究セミナーに積極的に参加すること、さらに適宜、興味のあるテーマについての講義、その他、頻りに開かれるさまざまな国際保健に関するセミナーに出席することです。毎週の武見研究セミナーは大学内の教授や外来講師をかこんでの一時間半にわたる講義と討論の時間です。私自身はこれによって、他の教室に滞在するフェローとは全く異なる経験をさせてもらえたと思っています。とかく自分の所属する教室のみに視野が限られがちな研究者の目を広く開かせる試みとして、これは高く評価したい活動のひとつです。また、毎週の昼食会では、折りにふれて故武見太郎氏の哲学について話し合う機会も持つことができました。さらに、各フェローの個別の研究に関しても、アドバイザーとして各人のテーマにふさわしい教授をあて、必要に応じてその方向、内容、さらには論文の英語にわたるまでの指導を得る



ことができるようにしてあります。

1986/87のフェローは五名で、私の外にタイの保健省からDr.ポンブーン、中国(上海医学院疫学)のDr.ワン、台湾(台北医学院)からDr.ラン、アメリカのヴァージニア大学からDr.グッドでした。それぞれ、疫学的、文化的視点および保健政策、保健経済的視点から各自の国あるいは発展途上国の社会を扱っていました。私自身は、日本を外から見る試みとして、戦後の占領期の人口動態統計制度の変革が如何に占領軍の影響下に進められたか、如何に日本人がそれに反応したか、如何に協力したか、について歴史的に既に国内で成立した制度を外部からの力によって、あるいは内部の人間がその外来の力を利用して変革していくひとつの技術移転の過程として記述したものです。このことは過去の事実であるに止まらず、かつて援助を受けていた日本が今や援助国として、いかに被援助国を理解し、現在の限られた資源と世界的保健協力の仕組みの中で何を重視して行くべきか、を考えるための示唆を与えるものです。そのための資料の多くは、何度かワシントンに滞在し、アメリカ国立公文書館分室に保存されている旧GHQ/SCAP東京事務所の膨大な未整理ファイルの中から得ることが出来たものです。

国際的視野で健康問題をとらえ、その中で日本であるからこそ果たすことの出来る役割

を明示し、それを具体的な場で生かしていきたいという方向が、決して誤りではないらしいということを経験が教えてくれました。このような実り豊かな機会を与えて下さった生存科学研究所に感謝いたします。

を明示し、それを具体的な場で生かしていきたいという方向が、決して誤りではないらしいということを経験が教えてくれました。このような実り豊かな機会を与えて下さった生存科学研究所に感謝いたします。

●生存科学ビュー・ポイント

健康福祉

A.C.ピグーの厚生経済学(Economics of Welfare)以来、現代経済学は福祉を貨幣で評価できる国民経済活動のフローの部分として定義してきました。その場合、非貨幣的福祉を含む一般的福祉は、経済的福祉と平行的に変化すると仮定されていました。しかし経済的福祉と一般的福祉はかならずしも平行的に動かないことが、日常生活経験から明らかになっています。このような経験的観察をもとにして、ある経済学者は経済的福祉と非経済的福祉との間のトレード・オフ関係の存在を考え、経済的福祉と非経済的福祉の実現計画において、妥協的選択の必要性を主張しました。またある社会学者は統合的福祉指標の開発の必要性を主張し、そのためのモデルを提示しました。しかし経済学や社会学だけでは福祉の解明は不十分であると考える人もいたことは確かであります。たとえばわれわれは、日本医師会特別医学分科会(ライフサイエンス学会)において、人類生存秩序の視点から福祉(ウェルフェア)を勉強

早稲田大学社会科学部教授 田村貞雄
しました。そこでは、ウェルフェアを「人類生存のよりよき条件をつくりだすこと」という内容で共通の理解を得ております。ウェルフェアをこのような内容で考えますと日常生活における健康の維持・増進についての個人的努力と社会的努力ということが中心的存在として浮び上がってきます。日本では多年来医療を地域包括医療の内容でとらえるということが提唱されており、このことにより行政組織もこの用語を使用するようになりました。そして地域包括医療の目標は地域住民の健康の維持・増進ということにおかれております。そこでわれわれはウェルフェアを地域包括医療の実践の内容を基本にして考えております。この場合、地域包括医療における地域はグローバルな地域連帯性のもとで考えられております。

このように健康福祉は非経済的福祉の視点も世界的福祉の視点も取り込み、経済的福祉とのバランスも考えておりますから、まさに新しい福祉体系といえると思います。

●エッセイズ・キュート

Be patientの英語教育

日本の経済・社会は、急速に国際化しつつあるが、何時も問題になるのが、日本の語学

教育だ。

昨年11月、日本の公立高校で英語を教えて

いる外国の若い教師が、全国各地から集まって反省会を開いた。

席上、出席者から、「日本では、文法に力を入れすぎる。もっと会話に重点を移すべきだ。」「どうして日本人の英語の先生は、われわれと英語で話をしてくれないのだ」と厳しい批判が続出した。たじたとした日本側の関係者から、「日本では、生徒の成績に格差をつけるために英語教育をしているのだ」というとんでもない言い訳まで出た。

ふと、思い出した。昭和28年頃であったが、アメリカ政府から日本政府に「日本の中学に、英語の教師を200人送りたい」という申し入れがあった。これに対して、日本の教職員組合が強く反発し、政府も時期尚早ということで辞退した。当時は、大学を出ても適当な職が少なく、日本の英語教師が「職を失う」と不安がったのも無理からぬことだったろう。しかし、もし、政府の大英断でこれを受け入

れていたら、こんにち、このような議論とはならなかったろう。

正確に言えば、これら若い外国人は、英語教師ではない。「英語指導主事助手」という肩書で、日本人の先生を助けている。英語の時間を二つに割り、前半は、日本人の先生が文法を、後半は「助手」が会話をうけもっているのもあるようだ。この制度、今年から急に拡大され、全国に848人が配属されている。夫婦でできているのも3組。来年は1300人となる。今のところ、米、英、豪、ニュージーランドの4ヶ国だが、近くカナダ、アイルランドからもくることになりそうだ。

反省会で、突然、一人の青年が立ち上がって、熱弁を振るった。「われわれは日本の英語教育を批判しにやってきたのではない。良くするためにきたのだ。みんなで、方法を考えよう。ここは我慢だ。Be patient.」(O)

維持会員だより

維持会員の地域医療活動の近況報告2題

高崎の村田謙二会員から

「臨床仏教学」を著わされた村田先生の、特別養護老人ホーム「高風園」における仏を背景とした末期ケアの活躍と、高齢化社会への対応として先生が推進されている「高崎在宅看護研究会」の活動を伝えるニュースをお送りいただきました。

神戸のト部文麿会員から

ト部先生がトータル・プロデュースしておられる。加古川市の加古川総合保健センターでの広域データベ

ースの完成と、生涯健康情報の管理・提供活動の報告をお送りいただきました。



どちらもかなり前にお送りいただいていたが、編集の都合で御報告が遅れてしまいました。

* * * *



山形県東根市に武見会長が題字をお書きになつた大きな石碑がある。私はその碑を見ることがなかったので建設場所などを尋ねるため、東根市や県医師会事務局に電話で尋ねたが、その存在すら知らなかった。長らく県医師会理事をなされた大沼行之先生が建設委員長として努力されたと聞いていたので、11月末日午後大沼先生宅をお伺いし昭和43年碑建設当時のことなどをお聞きした後に建設場所を訪れた。

東根市は山形市より20km程北に位置し、山形空港がある街で、自衛隊の第6師団が駐屯し、果物の産地としても知られている。自衛隊の正門前を左に折れて間もなく若木山と言う小さな山の西側に若木公園があり、その公園の山裾の中央に畳一畳程の碑に明治百年記念、慰霊碑、日本医師会長、武見太郎書と四行にかかれた碑が木立の中の落葉のじゅうたんの上にひっそりと建っていた。公園ではゲートボールの終わった老人達が数人日向ぼっこをしていた。

昭和43年会員数60数名の山形県寒河江市

西村山郡医師会が、東北地方では初めての検査センター、検診センターを併設した医師会館を建設した。その時私の父が医師会長であったが竣工式に武見会長も出席され“開心貫醫道”と言う色紙を頂戴し、父はその色紙を大切に居間にかけていた。

私は昭和50年頃から軽い脳卒中の患者でリハビリを兼ねて篆刻を勉強している書家に誘われて篆刻と書を習いはじめた。篆刻は一般にはなじみの薄い芸術だが石に篆書を刻するもので方寸の芸術とも云われている。作品の印は書や日本画とは切っても切れない関係にあるものの常に脇役として登場するので華やかさはない。その篆刻の勉強の為購入した本の中に篆刻のすゝめと云う本がある。その本の姓名印の作品例に武見太郎印と言う印が父がいただいた色紙の太郎と言う署名の下の印と同じであることに気がついた。

昭和55年4月その年に山形で開催される東北医学会総会の相談に当時日医の理事であった渡辺一男県医師会長と武見会長を会長室に尋ねた。雑談になってから先生の印が本にのっていることをお話したところ、あの印は杉並の先生に刻してもらったものだと言うことであつたが、お名前は失念してしまった。多分医事新報に篆刻のことをよく書いておられた寺尾殿治先生から刻していただいたものではないかと思う。

私は武見会長のとつとつとして温みのある大らかな書が大好きである。

(会員・山形県・小松清彦)

新規維持会員・寄付者の紹介

(昭和62年10月1日～昭和62年11月30日)

個人会員

高橋由美子 創美学研究所所長

久保まち子	元日本女子大学家政学部教授	三洋電機(株)	1,980,000円
小玉香津子	神奈川県立衛生短期大学教授	(株)三和銀行	1,200,000円
時子山ひろみ	日本女子大学家政学部助教授	(株)住友銀行	1,200,000円
我妻 堯	国立病院医療センター国際医療協力部長	(株)太陽神戸銀行	795,000円
法人会員		(株)第一勧業銀行	1,305,000円
武田薬品工業(株)		(株)大和銀行	690,000円
寄付		(株)東京銀行	975,000円
個人		(株)日本興業銀行	1,050,000円
北林春美	30,000円	(株)日本債券信用銀行	450,000円
法人		(株)日本長期信用銀行	795,000円
株崎玉銀行	450,000円	(株)富士銀行	1,305,000円

ニュース・オブ・ニュース

生存科学研究所日報

- 11月14日 第4回総務委員会
- 11月21日 第36回生存科学研究会
- 11月28日 第17回地域医療のあり方研究分科会
- 12月5日 第8回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会
- 12月19日 第4回研究企画委員会
- 12月19日 第9回メディコ・エコノミックズ研究委員会
- 12月26日 昭和62年度武見記念生存科学研究基金・生存科学研究所顧問会兼ハーバード大学武見国際保健講座日本委員会

* * * *

第3回総務委員会

10月17日午前11時から、研究所会議室において第3回総務委員会が開催された。

小平専務理事から議題に添った説明があり、生存科学研究所の研究主題は、生存の理法お

よび生存科学の基礎に関する研究と、その具体的展開である。そのために、研究活動の国際化のための、ハーバード関係を含む国際交流、研究発表の場としての生存科学研究会等が考えられるとして、それらを推進するための研究所組織の再編成が来年度に向け進められる必要性が述べられた。

又、来年の第3回武見シンポジウムは現在準備中の線にそって進めるが、将来は上記の研究成果を踏まえて、財団の目的達成のために、その主体性をより明確にして行く計画が討議された。第3回武見シンポジウムは、組織委員会に一任するが、これからの具体的な内容等について、各総務委員からも建設的意見が出された。

* * * *

第7回維持会員制度推進委員会

10月31日午後3時から、研究所会議室において第7回維持会員制度推進委員会が開催さ

れた。今回から、法人維持会員である電通サ
ドラー・アンド・ヘネシー株式会社の代表取
締役森重利直氏が新たに委員として参加。

会議は維持会員の最近の動向から始まり、
個人160名、法人29団体となったことが報告
された。特に慶応大学の三四会(医学部同窓
会)が法人維持会員として参加。同会が慶応医
師会へも参加を呼び掛けられたことが報告さ
れた。このほか、岡山での講演会、医薬品シ
ンポジウム等が報告され、次いで準会員や講
演会等、維持会員の新たな獲得に関して協議
された。

* * * *

第4回総務委員会

11月14日午後1時30分から、研究所会議室
において第4回総務委員会が開催された。先
ず、ハーバード大学関連事項が協議されたが、
これは11月下旬、財団の小平専務理事と国際
交流担当の開原理事がハーバード大学を訪れ、
チェン武見記念教授、ファインバーグ学部長
等と会談するに当たっての準備のためのもの
である。経団連関係の寄付が進捗し、財団の
財政基盤が武見プログラムへの財政援助額を
明確に表明できる段階になったため、武見
プログラム活動の継続が確立する。このほか、

62年度の合同顧問会と、新たに構成替えされ
たハーバード大学武見講座日本委員会の開催
が協議された。

次いで、来年度日本で開催される第3回武
見国際シンポジウムの組織委員会が、来春
早々、山村雄一先生、大来佐武郎先生出席の
もとに開催されること、第2回武見シンポジ
ウム報告書の日本語版出版の準備が進捗して
いること、科学技術庁の新しい委託研究への
受託申請がなされたこと等が報告された。

* * * *

小平専務理事、開原理事、訪米

上記総務委員会ハーバード関連討議の報告
にある目的をもって、11月30日、財団の小平
専務理事と開原理事がハーバード大学を訪問
した。

* * * *

第37回生存科学研究会予報

第37回生存科学研究会は、1988年1月16日
(土)、午後2時～5時、経団連会館901号室(大
手町)にて開催される。講師は大阪大学社会經
済研究所筑井甚吉教授。テーマは、技術社会
と「貧乏物語」。

* * * *

ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告

今号から、ハーバード大学公衆衛生大学院
武見プログラムの活動を、日本からのフェロ
ーの報告により掲載します。

武見研究セミナー

「輸血関連エイズ抑制のためのスクリーニン
グ評価について」ドナルド・シェパード
「相互依存システムについて」エマニュエ

ル・マックス

「プライマリー・ヘルスケア活動における地
域社会自立のための方法の研究」フォシア・
クレシ

「小児期・若年期の事故の疫学」バーナード・
ガイヤー

「中国医薬の臨床試験の評価」ユー・クオペ

イ
「中国の家族計画プログラムの問題点」ジョ
ーン・カウフマン

「中国における職業性呼吸疾患の疫学」デビ
ッド・クリスチアニ

武見フォーラム

「タバコと健康：貿易・政策にかかわる国際
的問題」

演者：グレゴリー・コナリー、テッド・
チェン、ピーター・ティンマー、トマス・
シェリング。

司会：マイケル・ライシュ

講演

「武見哲学入門」東京大学医学部開原茂允教
授

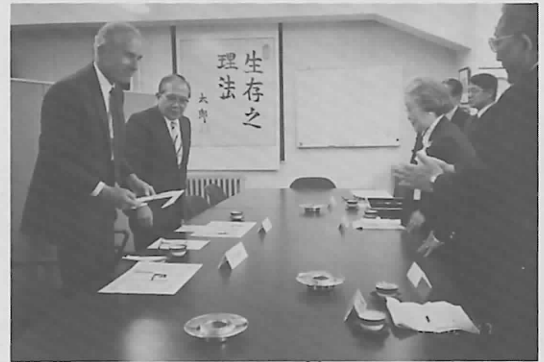
(第3回武見フェロー 丸井英二)

武見記念生存科学研究基金ニュース

第1回武見記念賞に土屋健三郎氏、ハワード・ハイアット氏選ばれる

公益信託武見記念生存科学研究基金は、生
存科学の研究に関する表彰と助成のための記
念事業として、「武見記念賞」と「生存科学研
究武見奨励賞」の制度を設けて、生存科学と
その関連分野で顕著な業績を納めた研究者ま
たは実践者に「武見記念賞」を、同分野で創
造的な研究または献身的な活動をおこなって
いる者に「生存科学研究武見奨励賞」を送る。
今年度は、時間的制約から武見記念のみが授
与とされることになっていた。

第1回武見記念賞受賞者は、産業医科大学
学長土屋健三郎氏と、ハーバード大学公衆衛
生大学院学部長H.H.ハイアット氏の両氏で、
生存科学の研究面で顕著な業績があるばかり



でなく、武見博士の提唱された、生存科学の
重要な基礎となる産業医学や医療資源の開発
と配分等の理念を、産業医科大学やハーバ
ード大学公衆衛生大学院武見国際保健講座等
の形で実践された方々である。



これに先立つ11月21日、霞が関ビル東海大学学友会館で開催された武見記念生存科学研究基金第2回表彰助成委員会(委員長は熊谷洋基金運営委員長)において、両氏が今回の受賞者として選ばれた。

受賞式は、12月17日(休)午後2時から、両氏を研究所会議室に迎え、武見英子生存科学研究基金名誉運営委員長列席のもとに執り行われた。

編集後記

新年おめでとう御座居ます。

財団は5年目を迎えました。新しい年度に向かい、愈々研究の深化と研究基盤の強化を図るために、新しい企画と新しい研究体制が新しい年を迎えて着々と進められています。

「研究所ニュース」は少し遅れて出発しましたが、3年目を迎えました。より一層の充実と、新しい発展を目指したいと思います。

そこで今回は、維持会員の方々と、その他ニュースをお送りしている方々へ、それぞれアンケートをお送りしました。ニュースへの御要望をはじめ、皆様方のアイデア、御指導等お寄せいただきたくお待ちしております。アンケートへの御回答を是非お願いいたします。

(N)

出版物のご案内

生存科学研究会での研究報告・討議内容の記録

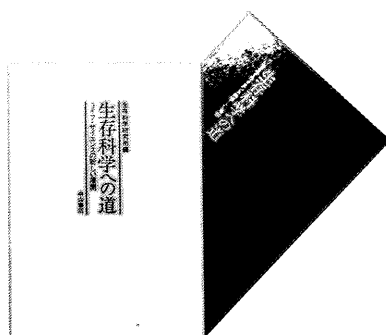
生存科学研究所編

生存科学への道

ライフ・サイエンスの新しい展開
(1984)

Towards the Science
for
Human Survival
Evolution of Life Science

発行所：中山書店・定価3,000円



お申し込み・お問い合わせ 生存科学研究所まで ☎(03)563-3518